

う。金銭の多寡は問題ではありません。魂の糧となるか否かが問題なのです。私が今回この大会を企画するに当って、先ず第一に問題として採り上げたのがこの一点でありました。そしてホスト・クラブもまたこの趣旨を充分理解して下さり、地区内八十一クラブの順番として八十年に一度、即ち会員にとっては生涯二度とめぐり会うことのない奉仕の機会として、全力を挙げてこの大会の設営に努力して下さいました。その物心両面にわたる奉仕は筆紙に尽し難いものがあります。然し、「金を儲けることは難しい。だがこれを上手に使うことはもっと難しい」と言います。その意味に於て皆様の奉仕は素晴らしい効果を發揮するものと信じて疑いません。とにかく今日から明日へと、二日間にわたって展開されるプログラムは、恐らくこれもまた空前絶後のものにて、簡素にして豪華——ジャン・コクトオ流に言う所の贅沢の美德でありましょう。元来日本の祭りは簡素にして豪華なものでありました。お茶もお能も然りであって、凡そ魂に語りかける道は、豪華を中に秘めた簡素であります。お茶やお能に於ける大道具、小道具、衣裳——一見無用に見える作法や型……然し、それなくして精神の根源に迫ることは出来ないであります。

ロータリーの大会の演出もそうありたい、と願いつゝ私達はプログラムを組みました。そしてその演出の主題は、「生きる喜びを発見しよう！」であります。これは私がガバナーに就任して以来、繰り返し呼びかけて来たテーマであります。ロビンス会長が「ロータリーの精神を振るい起こせ」というターゲットによって究極的にその実現を目差している所も、結局は生きとし生けるものすべてが生きる喜びを発見することに外ならない、と考えられるからであります。いや、凡そ我々の企てるすべての仕事が生きる喜びにつながるものでなければ、何の意味もないと私は考えます。

然し、顧みて戦後三十年、未だ曾て無い永い平和の中に、言論、集会あらゆる意味の自由を謳歌し、想像を絶する経済成長を遂げながら、果して人は生きる喜びに朝夕を迎えているでしょうか。「人生の目的は何か。それは大臣になることでも大將になることでもない。朝眼が覚めた時あゝ今日も生きている——と胸を拡げて精一杯生きている喜びを噛みしめることの出来る生活、そういう生き方をする事だ。」……曾て少年の日、私はある日何気なく手にした書物の中で、ある文士のおゝよその様な意味の言葉を発見し、はげしい心の昂ぶりを覚えました。由来これは私の人生指針となったのでありますが、人間にとって仕合わせとは、そういう生き方をすることに外なりません。然らば今日の我々の生活の実態はどうでしょうか。物質的には我々は幾十倍も豊かになりました。然し我々は幾十倍も仕合わせになつたでしょうか。否寧ろ物質の豊かさに反比例して精神は貧しくそして荒廃し、暗い冷たい虚無の風におののいては、刹那の

享楽に一時を逃避しているではありませんか。永い平和が続きましたが、「人は平和の重みに耐えられない」、ということも悲しむべき事実であります。それかあらぬか、何の謂われもなく突如として無関係な一般市民の生命が奪われるという様な、恐るべき兇悪犯罪が続出しているではありませんか。抗議行動と称する法秩序無視の騒擾に至っては枚挙に遑ありません。

また「欲望の多様化」とか称する言葉のもとに、当然の権利であるかの如く錯覚されている我儘勝手の横行は眼を覆うものがあります。平和と繁栄に酔い、すべての人が所謂「多様化した欲望」をそれぞれ満足させようと狂奔した結果、今我々が手に入れたものは何でありましょうか。カーター直前会長は「生活の質」という問題をテーマにしましたが、我々の「生活の質」は果たしてどうなったのでしょうか。皆さん、この三十年に及ぶ永い自由と平和と繁栄の果てに、今すべての人の胸の中を吹き抜ける、空しい、不気味な、冷たい風……これは一体どうしたことなのか？ 現代を一言で表現すれば、それは「我儘勝手時代」であり、そして「生き甲斐喪失時代」でありましょう。然し、それにも拘らずなお、人間存在の本質が人と人との間柄にある限り、人は人を求め、愛すること、愛されることを念願して居ります。ただその念願と現実との乖離が生き甲斐喪失となり、我儘勝手となって現われると見る外ありません。

こゝに興味深い重要な統計資料があります。それは一九七二年一〇月、総理府青少年対策本部が、世界十一ヶ国即ち日本、イギリス、フランス、スウェーデン、西ドイツ、ユーゴスラヴィヤ、インド、フィリピン、ブラジル、アメリカ、スイスの約二〇〇〇名の青年を対象に、いっせに行つた意識調査であります。言うまでもなく、何時の時代でも若者は最も時代の趨勢に鋭敏であり、若者の意識や行動はその置かれた社会環境によって決定されるのでありますから、これを明確に把握することは、現。在。を。知。り。明。日。を。考。え。る。上。で。重。要。な。意。味。を。持。つ。も。で。あ。り。ま。す。また、青少年問題という大きな活動対象を持っているロータリーとしても、これには重大な関心を寄せなければなりません。そこで少しその調査結果について御紹介しましょう。

先ず第一の設問、「人生の目標」については平均数値として、「誠実と愛」が四二・二%、「お金と地位」が三四・八%、「やりがいのある仕事」が三一・二%となっておりますが、これを各国別に見ると、我が日本の場合際立った特質が見られます。即ち「誠実と愛」はアメリカの六三・五%を筆頭に、スウェーデン五九・八%、ユーゴスラヴィア五八・四%、フランス五六・四%という高率に対し、我国の場合三五・八%で極めて低く、それに代って「やりがいのある仕事」が二八%と、先進国中の一位となって居ります。然もその反面、「何を求めてよいか分らない」という回答が、これまた一八・七%もあって、調査対象國中、群を抜いた高い数値を示しています。ちなみにこの「何を求めてよいか分らない」というのは、総平均で五・六%であり

ますから、我が国青年の虚脱気迷い症状がこれで分ろうというものです。社会の指導者であるべき我々が、今何をなさねばならぬか、考える種がこゝにあると思います。

第二の設問、「道に迷って困っている人をみかけたらあなたはどうしますか」に対して、「声をかけてみる」という答は、スイス、アメリカが五〇%以上で最も高く、日本は三〇%で最低になっています。勿論「たずねられれば教える」という答は何れの国でも高率ですが、他人に対する思いやりという点で、日本の人間関係には何か異常なものが見られるのではないのでしょうか。

第三の設問は、「人間の本性は善か悪か」ですが、驚くべきことに日本の青年の三三%が人間の本性を悪としています。これはスイスの一五・四%、アメリカの一六%、イギリスの一六・二%等に較べて異常に高く、こゝでも調査対象国中の最高数値を示しています。これは我が国青年の七四%もの多数が、「信仰に関心がない」と答えていることも表裏を為すものでしょうが、単にそればかりではなく、戦後の教育と社会風潮に根ざす所が大きいと言わなければなりません。

第四の設問、友人生活についての満足度では、各国とも九〇%前後の極めて高い満足度を示していますが、我が国の八三・九%はこれまたその中でも最低です。然しそれは、第五の設問、

「心をうちあけて話せる友人がいるか」、第六の設問、「友達づき合いは深入りすべきか」とも関連する所で、フランスの如きその様な深入りを肯定する答がわずか一二%しか見られないのに対し、我が国青年層の六八・八%もの圧倒的多数が深入りしたつき合いを求めているという、全く特異な意識構造と表裏を為すと言う外ありません。

次に青年の最大の悩みは親子の意見のくい違いで、スウェーデンの三五・三%を例外として各国共五〇%以上がこの不満を訴えています。そしてまた家庭の収入不足を不満とする者は、我が国と発展途上国に於て多いということです。

一方学校生活に於ける満足度については、何れの国でも友人関係、家庭生活にくらべて低いのですが、それでも諸外国が皆七割以上の満足度を示しているのに、我が国の場合だけは、「満足」と「やや満足」を合わせても五四・七%しかなかったという、これまた憂慮すべき状態であります。

次に勤労観ですが、各国とも共通して働く第一の目的として挙げられたものは、「収入を得ること」であって、「社会人としての義務」と答えた者が極めて少なかったことが注目されます。然し一方、「仕事を通じて自己を生かすこと」という答が、日本三四・五%、アメリカ三〇・三%、ブラジル四二・四%と高い数値を示していることも見逃がしてはなりません。またこれに関